

十八歳でマリアナ沖海戦に参加

群馬県 中村 光 男

私は大正十五（一九二六）年生れですが、その年に年号が昭和となりましたので昭和元年生れの方と同年代です。兄と弟の男三人、女三人の六人兄妹の次男坊として群馬県沼田町の農家に生まれました。私が幼少のころ母親が亡くなりましたので父親だけの片親に育てられました。当時の農家はほとんど手作業でしたので、小学校高学年になると、どこの農家でも手伝いをさせられたものでした。

私は学校を卒業すると中島飛行機製作所に勤務しました。世の中は日増しに戦争ムードが高まってきました、当時、学徒動員令なども発令されて大学生が徴兵されるようになったのもこのころだったと思います。

太平洋戦争の起ったのも私が十六歳になった年

の十二月でした。中島飛行機製作所には海軍の現役を退役したばかりの張り切った方が私の上役として勤務しておりました。そんな中であって十七歳になったばかりの私は海軍志願を勧められました。

現在ならまだ高校生で、世の中のことなど西も東も分からない若い時ですが、陸軍や海軍の大本営発表のラジオニュースや新聞報道は連戦連勝の多大な戦果を報道しており、何も知らない国民は喜んでいました。こんな中で私も海軍に憧れて横須賀海兵団を志願致しました。

昭和十八（一九四三）年五月一日、横須賀第二海兵団へ海軍二等整備兵として入団しました。当時の故郷は群馬県沼田町でしたが、戦後昭和三十年代に町村合併により沼田市になりました。入団に際しては家族や親族の人々のほかに地区の方々が総出で駅まで見送りに来て下さいました。

国家のためと気負い込んで、また懂れての入団でしたが、翌日からの新兵教育の厳しさには驚き

ました。どこまでが教育で、どこからが私的制裁か区別無く殴られながらの毎日でした。機関銃の分解や組み立て、水泳やボート漕ぎなどの初年兵教育の一期三カ月教育が終わって、海軍一等整備兵に進級したのが昭和十八年八月十五日でした。同日付けで横須賀海軍航空隊付きを命ぜられました。勤務内容はあまり変わりませんでした。

九月二十二日、第二十四期普通科兵器整備術練習生として千葉県館山の近くにある州崎海軍航空隊に転属を命ぜられました。入隊しますと胸に桜のマークをつけるのですが、普通科は一重の桜で、高等科になると二重の桜のマークになるのです。こちらへ入隊しても、また殴る蹴るの制裁がひどくなりました。

昭和十九年二月二十九日、普通科兵器整備術練習過程を卒業して同日付けで、第六〇一海軍航空隊付きを命ぜられ、山口県の舞鶴航空隊に転属しました。この六〇一海軍航空隊は本部が昭南島にあるとのことでしたので、差し当たり舞鶴軍港へ

行きました。

当日は雪降りで、見る限り真白に積もっておりました。当日付けで航空母艦「瑞鶴に乗艦せよ」の命令で軍港へ行き、入港していた「瑞鶴」を見ますと、その大きさに度肝を抜かれました。総トン数三万三千トン、飛行機搭載数百機、乗組員二千人と言う説明を聞いて、こんな大きい航空母艦なら爆弾の一発や魚雷の一発食らっても絶対に沈まないだろうと安心して乗艦しました。

乗って見ると思った通り安定して大しけでも来ない限り艦が大きく揺れることはありませんでした。三日ほどしますと艦内が暑くなって来ましたので古参兵殿にどの辺りを航海しているのですかと聞きますと台湾沖を通過中だと教えてくれました。私たち一兵卒にはどこへ行くのか見当も付きませんでした。

一週間ほどして着いた所は昭南島で、翌日からこの占領地での訓練が始まりました。外地での訓練は戸惑うことばかりでした。航空母艦での訓練

は実戦さながらで、航空母艦は私たちの乗っている「瑞鶴」の他に「瑞鳳」「翔鶴」「大鷹」など、いずれも搭載機百機と言う大きな航空母艦ばかりでした。

他に戦艦や駆逐艦もいたのかどうかは私には分かりませんが、昭和十九年三月十五日、大きな船団を組んでマレー沖、中部太平洋沖へと、マリアナ海戦に向けての出航でした。

何日かして敵の機動艦隊と遭遇して海空戦が始まりました。敵の主力は空軍にあつたようで、次々と爆撃機や戦闘機が上空を飛び回り攻撃して来ました。途中から敵潜水艦まで加わって魚雷攻撃も始まりました。我が航空母艦は全速力で航行したり、急速で進路変更したりして、爆撃や魚雷をかわすのに死に物狂いで航行を続けました。その間こちらも懸命の射撃で応戦をしましたが、残念ながら何発かの敵弾が被弾して命からがら戦列を離れ、四国の松山へ逃げ帰りました。

近代戦争のすさまじい戦闘に、我々兵隊は、陸

軍の肉弾戦と違って何もできない艦内においての砲弾運びぐらいが精いっぱい、悔しい思いでした。幸い沈没を免れたので命拾いをしましたが、他の艦船はどうなったか、肉眼では全然分かりませんでした。

目の前に展開された近代戦争の昼も欺く閃光や耳をつんざく爆発音は、本当にこの世の生地獄で、体験した者でなければ話になりません。従軍手帳には「戦務甲」と記入されておりました。

十一月一日、海軍上等整備兵に進級して陸上勤務と海上勤務に分けられて、私は陸上勤務となりました。そして海軍特別攻撃兵器兵を命ぜられ、松山において爆撃機「銀河」の一番前に乗って爆撃投下の訓練をさせられました。

昭和二十年五月一日、海軍整備兵長に任ぜられ、六月一日、九州海軍航空隊（宮崎航空基地）に転勤を命ぜられました。一カ月ほどして第七〇六海軍航空隊付きを命ぜられ、今度は東北の宮城県松島航空基地に転勤となりました。

このころになると誰言うもなく日本の敗戦が噂されるようになって来ました。しかし部隊長は硫黄島の奪回作戦があると言って張り切っております。

八月十五日、海軍二等整備兵曹に進級した後、部隊長から日本はポツダム宣言を無条件に承認して降伏したので、戦争は終わったと知らされました。私が満十九歳の夏でした。

八月十七日、松島駅から汽車に乗車、大宮駅で乗り換え、高崎駅を経由して前橋駅から歩いて我が家へ帰りました。東京をはじめ大阪、名古屋などの大都市は爆撃で焼野原となり、広島、長崎も工場はほとんど破壊され、復員して来ても働く所はありません。幸い故郷の田舎町も我が家も無事で、しばらくは農業の手伝いなどして過しました。

昭和二十二年、長兄がジャワ島から復員して来たので、私は家業を離れて現在の東京電力(株)に就職、以後定年まで勤務しました。縁あって隣町の長男が戦死した一人娘の家庭に謂われて婿養子

に入り、その家を相続して現在に至っております。今は長男に家督を譲り、老妻と共に三人の子供の長男夫婦、孫夫婦、そして孫たちと同居生活をしております。

あの戦争を振り返って見ますと国家のためと、わざわざ志願までして入隊したのですが、結果的には何だったのか今だに答えは見つかりません。NHKのテレビで、ある老人が、「軍隊に入ってから三カ月で敗戦となって帰って来たが何しに行ったのか分からない、三カ月殴られるために行ったみたいだ」と言っていて苦笑していましたが、私も似たようなものだったかも知れないと思っております。戦後六十年以上経りましたが、この間、戦争の無い国は日本とスイスだけだといわれます。その平和な日本に感謝すると共に、物に恵まれすぎて、言わば「もったい無い」日常の生活だと痛切に感じながら今日を大事に生きております。